

日本の移民者

浅海 荘吾

(株式会社クラウンムービングサービス)

日本人の海外移民は王政復古（1868年）に始まりました。世界各地を結びつける国際経済、労働市場、交通網の一部となった日本は経済混乱とそれに伴う急速な社会変化に見舞われました。特に農業形態や経済構造が変わっていくなかで、農村部を中心に余剰労働力及び家庭経済が貧困化する状況が生まれ、国内及び海外への出稼ぎ労働者が増加しました。全ては自然に、必要性に従って起こったことです。1868年にアメリカ商人が148人の日本人労働者をハワイの砂糖プランテーションと40人をグアムへ送ったことから始まりでした。元年者と呼ばれた、近代日本最初の海外移民者でした。渡航地で奴隷にも等しい取扱いを受け、政府に救助されました。そんな事がありまして、20年近く日本人の組織的海外渡航は許されませんでした。

1885年から1894年に総計2万9000人、3年契約でハワイ王国で砂糖プランテーションで働く為に渡航しました。1894年頃に植民協会が設立することで移民政策に関する考えが多いに広がり、考えられることになりました。19世紀末から20世紀の初めまで北米へ多数の日本人学生が以前の方々と違って語学力と知識を求めて、渡航しました。経済的に恵まれている学生は東部の有名大学で留学しましたが、多くは「スクールボーイ」と知られた現代で言うバイトをしながら英語学校に通いました。だが、日本人人口の急激な増加は白人の人種的恐怖心を煽り、1924年日本人移民入国を禁止し、4年後にはカナダへの日本人入国が極度に制限されることになりました。ブラジルは北米とカナダに続く移民先の人気地でした。

ブラジルは1888年5月に奴隷が解放されまして、労働力を確保のためヨーロッパで移民誘致を行った。1892年に日本人と中国人の移民も受け入れることが認められました。交渉が段階的に進められる中で条件の変化で失敗に終わったブラジル移民計画もありました。出航直前に中止された、「財政上の恐慌に遇へる為、契約を」電報のためでした。計画通り日本の神戸港から第一回の渡航した移民者は職業がバラバラで、ブラジルのサントス港から各コーヒー園に配耕されました。コーヒー園での状態は過酷なものでした。不作と不慣れな労働、低賃金等の原因で契約満了以前に脱耕する者多く出ました。1924年以降、移住者の大量送り出し時代始まるとともに日本政府が船賃や移民会手数料を支給するなど、国策としての移住が推し進められました。1933年から1934年に最盛期を迎えました。両年ともに二万人を超える移住者を記録します。

戦後は1952年移住が再開され、アマゾン地域及びマツグロツソ地域へ開拓するための移住が送られました。1960年に日伯移住協定が調印され、この年は7千人を超える移住者がありました。日本経済の発展に伴い1964年には1千人を下回りそれからどんどん減少して、1993年に日本政府は移住者送出事業を事実上終了しました。

これは日本移住者の話です。つまり、私の話でもあります。それを今まで、深く調べなかったのが恥ずかしいです。我が家の移民者としての物語は父親がブラジルへ来ることを決心した時だと思います。ブラジルの地を踏んだのが1963年日です。それから母親が1968年に渡航しました。母親は父親と面会せずに何回かの文通の末結婚を決意したそうです。三人男兄弟の真ん中として1971年にブラジルのサンパウロ州、バウルーと言う街で生まれました。母親は私を出産時は一人でタクシーに乗って病院へ行ったと聞いて驚きました。拙いポルトガル語でよくやったと褒めたいです。バウルーでは幼い頃の記憶はなくて、父親の次の転勤先のパラプアンの町の幼児の思い出が一番強いです。父親は養鶏場での一番の責任者で、その中心にあった屋敷に住むことがゆるされました。日常生活の中での交流は色々な人種の存在するのが当たり前でした。ブラジルで生きる中、両親は勉強を第一としました。家では日本語を話して、外ではポルトガル語を話す事になっていました。学校に行くにはバスで兄貴と一緒に通っていました。田舎の小さな町の小学校に通っていました。そこでも多文化社会が当たり前で、自分と似たような人を探すのが楽しかったです。でも初めての日は母と一緒に行ったことを今でも覚えています。外周を囲むフェンスにしがみついて、泣きながら母の姿が見えなくなるまでそこを離れなかった自分がいました。すべてが簡単ではないことでした。通常の学校が終わると日本語学校に行ってから帰宅でした。帰ると母親はまた勉強になっていたのです。そうなる前に逃げ出しました。大自然の呼ぶ声に逆らえなかったんです。木の上が大好きでした。養鶏場のあらゆる場所に果物の木がありました。マンゴにみかんにアボカドにバナナ、その他にもまだありまして、直接木から熟した果物を取って食べることが最高でした。遊んで家に帰るのが恐ろしくて、家の外で隠れて、恐怖で動けないことも多々ありました。見つかるお仕置きが待っていました。父の交流は日本人の移民者が多く、自分が幼い頃は二つの世界があると感じました。両親は日本からの輸入品で月刊一年生を取り寄せてくれました。一月遅れで届いていました。ドラえもん、ウルトラマンの話を読むのが凄く楽しかったです。近くにバストスの町がありました。毎年卵祭りを開催されました。それも楽しみであった。活気に満ちた祭りでした。田舎暮らしはこれで初めてで最後でした。

同じサンパウロ州のバウルーと言うまちに父が転勤になりまして、家族みんなで動くことになりました。そこで国立の小学校に通って、友達の中に日系はいませんでした。日々が勉強中心になりました。日本語学校は家から遠い所にありまして、そこま

で行くのが冒険でした。母の存在が大きいと思いました。ポルトガル語は下手だが、色んな試練をのり超えてきました。それには恥ずかしい気持ちもありましたが、打たれ強い印象も強かったです。国立から私立の小学校に転校はレベルアップを考えて母が家計を調整して、可能になりました。勉強を頑張る他に選択肢はなくなりました。私立小学校はカソリックのシスターが中心になって算数、理科、歴史、地理の科目とカソリックの教えのクラスもふくまれていました。その時ぐらいでした。日曜日の朝に日本語を勉強する目的でプロテスタントの教会に通い始めました。勉強は色んな面で充実しましたが、カトリックとプロテスタントの違いを教えられて、家に帰るとお仏壇が置かれていて、先祖へ対しての敬いの気持ちを忘れないでの言及する両親がいました。心の保ち方がとても難しく、全てからの影響が嫌になりましたと思います。バウルーで過ごした日々は母親の存在が大きかった。ちょっぴり恥ずかしい気持ちでしたが、拙いポルトガル語で色んなことに挑戦する姿に感化されました。

また、父親の転勤で次は同じサンパウロ州のモジダスクルゼスへ引っ越しました。国立の中学校一年に通い始めたときのことでした。日本人の外見を嫌な言い方されるようになりました。それを避けるため出来るだけおとなしくするのが一つの逃げ道でした。でも同時に日本から我々の前に訪れた方々の決意の証で、日本人は努力家、正直で真面目と言う評判がありました。とても誇りに思えました。思春期の自分の支えにと思いましたが、外見が一番気掛かりでした。ブラジルでの落とし穴でした。それに落ちた自分が恥ずかしいです。それは私立の高校になって日々が勉強の地獄になりました。国立から私立へ転校して、家計に負担していることは言う必要もないです。自分も嫌でもするしかなかったんです。国立では半日で終わる授業が、私立では午後からも授業もあったため、昼食を持っていく必要がありました。それが食パンの袋とオレンジジュースか牛乳の一リットルのパックでした。部活に入りたいと言っても無視されました。兄貴は一年上でとても成績が優秀でした。それがあって、自分もそれに負けない様に頑張りました。自分自身を見つめ直す毎日でした。最後の追込みは母親が嫌いになりました。自分の出来の悪さを母親の責任転換していました。兄貴は期待通りの結果をだし、サンパウロ大学に合格しました。次に僕の番でした。両親の考え方とは出来るだけ歯向かうことに懸命に努めました。自分が生まれ育ったブラジルでは自力でやり遂げることに重心を感じていたからです。

奇跡的にサンパウロ大学へ合格して、ブラジルで一番の大学での生活が始まりました。1989年のことでした。日系ブラジル人数が多くて驚きました。僕は会計学部でも同じクラスメイトの中でも日系ブラジル人が七人もいました。僕を含めたら八人で、クラスの30人を考えると多いと思いました。大学全体を見ても、医学部から工業学部まで日系の数は多かったです。誇らしい気持ちになるぐらいでした。東洋の考え方と西洋の考え方の違いは水と油のように交じることが難しいことに気付きました。ブラジルで一番優秀なサンパウロ大学でこれほど数多くの日系が居ながら社会で

目立つ位置に日系がないのはどうしてなのか考える機会でありました。先代から受け継がれてきた、東洋的な人間の在り方が足を引っ張る結果として出てきていました。ブラジルはアメリカからの考え方を見習い、ブラジルなりの解釈をしているからです。人格よりやり手であることを前提として成功者をきめてきました。人間関係が豊富で、社交的活発の西洋人に決まる傾向があります。ブラジルに名言を当てはめるなら、神に自転車を頼みました。だが、やり方がまずいと気付いた、自転車を盗み神の許しを求めました。善悪は極めて決定的ではないことに気づきました。柔軟性があると考えるんです。日系はそれに従うことができないと思います。

大学卒業後、就職活動しました。三井物産に就職しました。それに感化されずに半年後に退職して、ブラジルから出ました。向かったのがイスラエルでした。ユダヤ人に凄く興味を持っていました。長い歴史の中でディアスポラを二回も経験しながら、国も無くしながら、イスラエルと言う立派な国を再び立ちなおせたことが興味深かったです。そこで目にしたのが徹底的に次の世代にユダヤ教を伝える習慣ともちろんユダヤ人である誇りを持てる教育の用いられる国でした。羨ましい気持ちになりました。ブラジルの日系が自身をこう思えば、今の日系社会は違っていたと思います。ブラジルの社会にもっと影響出来ていたと思います。

150年の時、日本から世界へ出てきた移住者の希望はどんなものだったかを考える必要があります。一人の移住者の気持ちが今のブラジルの日系社会の姿が満足出来るか。日本から世界へ出ていた国々の北アメリカ、南アメリカは移住者で出来た国々です。日本はそれとは違って、長い歴史の中で閉鎖的でものの在り方長い歴史を通して出来た考え方、感じ方、善悪の意識を設立してきました。そこで近代日本でブラジルからの出稼ぎ労働者を受け入れた時の教訓が残っていると思います。目的は金銭であった日系人は皆ブラジルへ帰国しましたが、日本に残った日系人もいます。その理由は金銭の他に魅力があるものを見つけたからだだと思います。日本は未来における課題がありますので、それを明確にして、日本人の多文化社会への教育が必要です。それに加えて、労働者を受け入れる際の教育も不可欠です。だが、自分たちの出来ることをしてからです。国際社会の考え方をどう受け入れるかに掛かっています。日本人の在り方を考える時の訪れだと強く感じています。